

# 四段目 寺入りの段

一字千金※1二千金、三千世界※2の宝ぞと、教へる人

に習ふ子の中に交はる菅秀才かんしゆうさい、武部源蔵夫婦たけべげんぞうの

者、いたわ傳かき我が子ぞと、人目に見せて片山家※3、

芹生せりようの里※4へ所替※5へ。子ども集めて読書きの器用不

器用清書きよがきを、顔に書く子と手に書く子人形書く子

は頭※7かく、教へる人は取り分けて世話をかくとぞ

見えにける

中※8に年嵩五作としかぎごさくが息子

「コレ皆これ見や。お師匠さんの留守※9の間に、手

習ひするは大きな損。おりや坊主頭※10の清書し

た」

と、見せるは十五のよだれくり※10

若君はおとなしく

「一日に一字学べば三百六十字※11との教へ。そん

な事書かずとも本の清書したがよい」

八つになる子に叱られて

「エ、ませよ、く※12」

と指差して、誂戯ちようげか、るを※13

残りの子ども

「兄弟子に口過※14ごすよだれくりめを歪いめてやろ※15」

と、手ん手に卦算けさん振り廻※16す、自然天然肩持まわつも、

伝はる筆の威徳※17かや

主の女房奥より立出で

※1 一字は千金のお金に値する。中国の『史記』に咸陽(かんよう)の門に漢字を一字書く者に千金を与えた故事から。

※2 この世のすべての。「千金」「二千」「三千」世界と縁語を並べる。

※3 武部源蔵と戸浪夫婦は菅秀才を大切に養育し表向きは自分たちの子だと振る舞っている。

※4 京都の辺鄙な芹生の山里。

※5 引越してきた。

※6 寺子屋を開いて。

※7 字を書かずに落書きをする子は師匠に叱られて頭をかく。

※8 年長。

※9 へのへのもへじ。

※10 涎を垂らすので「よだれくり」とあだ名がついた。

※11 当時寺子屋で用いられた教材『童子訓(どうじくん)』にある。

※12 ませた事を言う奴だ。

※13 ふざけかかる。

※14 失礼な事を言う。

※15 ひどい目にあわせよう。

※16 文鎮(ぶんちん)。

※17 自然と菅秀才を庇うのも菅丞相を父に持つ徳であろうか。

「またこりや例の諍いざかひか、おとまましやくよく今日けふ」

に限つて連れ合ひの源藏殿、振舞ま舞まに行てなれば

戻りも知れぬ。ほんにくこなた衆しゆで一時の間も

待ち兼ねる。今日は取り分け寺入りもある筈はず。

昼からは休ます程に皆精出して、習ふたく」

「ソリヤまた嬉しや休みぢや」

と、筆より先に読み声高く

「いろはに」

「この中は御人下され」

「一筆啓上、候べく」

の男おとこが肩かたに堺重さかいぢゆう、文庫机ぶんこを担かかはせて、利発りらしきしき

女房にようばうの七つばかりな子を連れて

「頼みませう」

と言ひ入る、

内にもそれとはや悟り

「こちへお入りあそばせ」

と、言ふもしとやか

『アイあく』と、愛あいに愛持あいぢつ女子こ士し、来た女房

はなほ笑顔

「私わたしことは、この村はづれに軽かろう暮くしてをる者

でござりまする。この腕うで白しろ者ものをお世話せわなされて

下さりよかと、お尋ね申しにおこしましたれば

『おこせ、世話せわしてやる』と結構けいこくなお詞ことばに甘あまへ、

早速連れて参じました。内方うちかたにもご子息こじ様がご

ざりますげなが、どのお子こでござりますぞ」

「アイこれが源藏殿げんざうの跡取りあとどりでござります」

※1 喧嘩。

※2 困つたものだ。

※3 お呼ばれ。

※4 お前たちのせいで、少しの時間も待ち

遠しい。

※5 特別に。

※6 新しい入門者。

※7 休ませる。

※8 寺子屋で最初に

習う文字。

※9 礼状の決まり文

句。

※10 手紙の書き出し。

※11 身分の低い使用

人などの名前に「可内

(べくない)・可助(べ

くすけ)」が多いので

「べくの男」と「候べ

く」の掛詞。

※12 大阪府堺市名産

の重箱。

※13 書物を入れる箱。

※14 頭の良さそうな。

※15 御免くださいま

せ。

※16 「アイ」という返

事と「愛」との掛詞。

人当たりの良い。

※17 身分の低い者が

慎ましく。

※18 利かんの気の子。

※19 よこしましたら。

※20 ここへ通わせな

さい。

※21 いらつしゃると

伺いましたが。

※22 跡継ぎ。

「これはくよいお子様や。他にも大勢の子達、いかいお世話でござりましょ」

「アイご推量なされて下さりませ。して寺入りは、このお子でござりますか、名は何と申します」

「アイ小太郎こたろうと申しまして、腕白者でござります」

「イヤく気高い※2よいお子や。折悪う※3今日は連れ合ひ源蔵も振舞に参られました」

「これはマアお留守かいな」

「イヤお待ち遠※4なら、私が呼びに参りましょ」

「イエく幸ひ私も参つて来る所があれば、その内にはお帰りでござりませう。コレ三助、その持つて来た物、あなたの傍へ上げませ」

「アツ※5」と答へて堺重、櫃へきに乗せたる一包み、内儀の傍へ差出だす

「これはマアく言はれぬことを※7」

「イヤおはもじながらこの子が参つた印。この堺重は子達への土産、取り弘めて下さりませ」

と、言はねど知れし蒸物煮しめ、我が子に世話を

焼豆腐、粒椎茸※13の入れたるは、奔走子ほんそうごとこそ見へにけれ※14

「これはマア何から何まで取り揃へてご念の入つた事※15。戻られたら見せませう」

「イヤモほんの心ばかり※16。よろしうお頼み申し上げます。コレ小太郎、ちよつと隣村まで行

※1 たいへんなお世話で。

※2 品の良さそうな。

※3 間の悪いことに。

※4 そちらがお急ぎならば。

※5 ハイ。

※6 檜や杉の木を薄く切つて作った、物を包んだりするもの。

※7 それには及びません。ここではお氣遣い下さつて有難うございますの意。

※8 「はもじ」恥ずかしながらの女房言葉。

※9 銘々に取り分けてやつて披露して下さい。

※10 それとは言わなかが分かる。

※11 赤飯などの蒸し物。

※12 野菜をだし醤油で煮しめた煮物。

※13 小さい椎茸の煮物。

※14 手塩にかけた子どもだとわかる。

※15 ご丁寧には有難うございます。

※16 「ほんの気持ちです」と謙遜する。

来る程に、おとなしうして待つてゐや。悪あが

きせまいぞ。<sup>※1</sup>ご内証様、<sup>※2</sup>行て参じましょ

と表へ出づれば

「か、様、わしも行きたい」

と継り付くを

振り放し

「嗜めよ。大きな形して跡追ふのか。ご覧じま

せ、まだ頑是がござりませぬ」

「ソリヤ道理いな。ドリヤ小母がよい物やりま

しよ。つゝ戻つてやらんせ」

と目で知らすれば

「アイくついちよつと一走り」

と、跡追ふ子にも引かざる、<sup>※6</sup>振り返り見返りて、<sup>※7</sup>

下部

※1 悪ふざけしないように。

※2 奥方。

※3 聞き分けがございませぬ。

※4 すぐに戻つて。

※5 目で合図を送ると。

※6 一緒に行くとせがむ子どもに心が残ったのか。

※7 後を振り返つて。